

### 3. 『測量随録 原稿』とその内容について (3)

大田寛之 (国土地理院)

#### I.はじめに

『測量随録 原稿』は陸地測量部が作成を指示した「陸地測量部沿革誌の裏面史」で、明治・大正期の陸地測量部の事業について当時の技師らが執筆した回顧録である。その一部について、前々号より連載を行っており（大田,2021 ;大田,2022）、今号では若林鶴三郎、川名八蔵の二氏の原稿及び「元陸地測量師矢島守一杉山正治両氏之遺績録」を掲載する。

今号に掲載の原稿も前号までと同様に原則として誤字脱字含めて原稿の記載通りとした。ただ

し、一部の異体字は正字体に改めた。なお、句読点の用法が今日と異なる箇所が多数あるが、それも原稿のままとした。一部の用語には\*を付し、文末に簡単な説明を加えた。

各執筆者の回想文の冒頭に記載された漢数字は大田（2021）で記載したように陸地測量部が各執筆者に指定した原稿内容毎につけられた番号である。以下に再掲する（表1）。漢数字でなく（特）と記載されたものは特別原稿で、各執筆者が測量随録の内容にふさわしいと判断した内容になっている。

表1 原稿内容の指示

番号	項目
1	創設当初ニ於ケル測量部ノ気風ト其後ノ推移
2	各課発展ノ推移ト測量部ノ編成
3	測量部ニ於ケル教育補充ノ状況 イ.優秀測量官ヲ得ル為ニ執リタル手段方法 ロ.測量手任官後ノ技備保持向上ノ為ノ対策 ハ.測量師ヲ志願スル者ノ奮励努力ノ状況ト之カ指導ノ概要
4	測量部建築物ノ建築状況ト之カ充当ノ変遷
5	測量法発達ノ経過
6	基本図（地形図, 編纂図）梯尺ト図式ノ変遷
7	製図, 製版, 印刷技術ノ創始ト之カ発達
8	時代ノ変遷ニ伴フ器材整備ト之カ使用状況
9	地図用紙及一般消耗品充用規格ノ変遷ト之ガ調達状況
10	測量事業ノ拡大ト令達予算
11	発行地図ト特別依託地図トノ利用状況
12	各種戦役ニ於ケル部ノ事業及実戦場裡ニ於ケル派遣部隊ノ編成, 測量隊ノ活躍
13	戦闘ニ直接貢献セル測量ノ概要
14	国勢進展（学術, 文化, 産業等）ニ寄与セル測量事業ノ概要
15	外邦測量
16	測量及製図等各種作業ニ関シ大ナル影響ヲ及ホシタル経歴談其他
17	朝鮮, 台湾, 樺太ニ於ケル測量
18	外国依託学生ノ測量官養成教育

## II.若林鶴三郎氏原稿

若林鶴三郎

・明治三十三年台湾土地調査局雇・全三十四年全  
局技手・生徒十四期・學生十一期・昭和七年高等  
官四等・全十年依願免官・現在囑託・大正十年帝  
大理學部聴講・昭和二年班長

### (一七) 臺灣の三角測量

若林鶴三郎

臺灣の三角測量は領臺當時地籍測量の基準  
点を定むるため臺灣總督府に於て施行され全  
島の測量を終了してから約十年の後に至り陸  
地測量部に於て日本内地と同様に正規の三角  
測量を実施され既に其完成期に近づいて居る、  
此様に臨機の処置と永久施設と云ふ異なる目的  
のために臺灣の三角測量は重複して行はれ其  
結果として、測量の方法と精度と云ふ至難なる  
問題が具体的に答解されたのである尚南洋諸  
島の測量に對して幾多の資料を提供する大実  
験であつた。

總督府に於ては明治三十三年八月臨時臺灣  
土地調査局官制を公布し局長は民政長官を以  
て之に充て次長以下奏任官二十九名判任官七  
百八十名を専任とし五課に分れ三角測量に関  
する事項は圖根科に分掌す、と定められた。

圖根科は課長に前田前大尉、幹部技術者に測  
量師一名測量手三名が測量部より轉任し新に  
募集した作業員五十名と事務員数名を以て編  
成された。

作業員は徴兵検査を終了したる三十才未満  
の獨身者で中学卒業程度の選抜試験に依り採  
用され、明治三十二年第一期生二十五名を東京  
に於て募集し測量部修技所に委託して十箇月  
教育の上土地調査局技手に任官、翌三十三年六  
月第二期生二十五名を全国各地に於て募集し  
臺北に於て十箇月教育の上任官せしめ以上五  
十名の測量官が各地に分散して作業する間に  
戦死二名病死数名の尊き犠牲者を出したので

ある

三角測量の目的は地籍測量に必要な基準  
点を決定するにあり然し実行する段になると  
我に六倍の大編成を以て進行する面積測量に  
先んじて三角点の成果を供給すべしと云ふ絶  
對条件があるので日本内地の様に基線から始  
めて一等二等三等と順序的に施行することは  
望まれない従て内地と同じ器械で同じ回数観  
測する点にしても之を決定する與件に相違が  
あるので精度の低下は免れない此様な訳で内  
地と同様に三等三角点四等三角点と云ふ様な  
名稱を用ふる事は許されず主点(主三等三角点)  
次点(次三等三角点)圖根点なる名稱を採用され  
たのである。

基線長は通常千米とし両端点間は二米間隔  
に杭を打ち連ね地上一米以内の水平面上にあ  
る様に杭の上端を鋸断し、傾斜地に於ては垂直  
段階に依て接續し第二の水平面に揃へると云  
ふ方法を採り之等の杭上に長さ二間の四寸角  
を打ち付けて基線全長に亘る測定臺を造り上  
面に基線の投影直線を引き測定するのである。

基線尺は二十米鋼紐尺二條を携行し一條は  
実測に用ひ他の一條は測定尺の長さを檢定す  
る原尺とす、而して基線測定法は基線尺を測定  
臺上に引張り後端は零分劃を定点に合せて固  
定し前端は二貫五百匁の張力で引張した時の  
二十米分劃を木材上に点示する之と同時に氣  
温を測定して一測定を終り順次前進するもの  
で測定値には米以下の端数を存せず且つ水平  
測定なるを以て傾斜改正の必要はない。

主点は標準距離を九吉米とし測地の中部を  
縦貫する單三角鎖を形成するもので三角鎖五  
十吉米毎に基線を設けて辺長の精度を保たし  
め、測角は三等経緯儀を用ひ六對回\*の方向観  
測とす而して測量地域は蕃地\*を除きたる行政  
地區であるから主点三角鎖は中央山脈の周辺  
を圍つて閉塞する豫定であつたが蘇澳花蓮港  
間には東洋一と呼ぶ断崖があり一般に山岳が

海岸に迫り海辺に平地は殆どなく到る所に兇暴な蕃社\*が散在して陸上の交通は全く不可能なる状態にあり此ため全三角鎖の閉塞点検を見るに至らずして終了した。

次点は主点を合せ一方里一点の割合を以て全測地に配点し三等経緯儀を用ひて三對回觀測す、圖根点は主点或は次点一点に對し三点の割合を以て配点し内地に於ける四等三角点と同様前方交會法\*に依りて決定す、従て全測地に於ける三角点の密度は主点次点圖根点を合せて一方里約四点の割合である。

計算法は測量部の法式に準じ経緯度及縦横線の原点を臺中に定め主点は三角鎖の平均を為し次点及圖根点は縦横線の平均に依る而して標高の基準面は基隆港に於ける數年間の平均潮位に基くものである。

測量作業の進程は三十三年度の後半期と三十四年度に於て新竹地方より臺中嘉義臺南を経て恒春に至る西海岸一帶の平野を完成し三十五年度に於て恒春より臺東花蓮港に至る東海岸地方と蘇澳より臺北桃園を経て新竹地方の既設測量に接續する地域及澎湖島紅頭嶼の測量を終了し翌三十六年度は主として計算整理に當り傍ら地方に残存せる小地區の補設作業を為したるものにして着手以来実動三年半の間に基線十二箇所、主点二百余点、次点圖根点を合せて約三千点を決定し圖根課担任の業務は完全に終了されたのである。

其後陸地測量部では明治四十二年より臺灣の測量に着手されたが本格的作業は大正三年より十四年に至る十二年間に於て蕃地約八百方里を除き約千五百方里の三角測量を完成し爾後蕃情の平穩に歸するを待つて蕃地の測量を進め今や其完成期に近づきつゝある。

以上兩回の測量結果より前者の精度を求めてみると大体次の程度にある。

- 一. 臺中原点の数值は新原点虎仔山\*より得たる値に比較し緯度は約十五秒小、經度は約

- 五秒大にして原方位角は約十七秒大なり。
- 二. 距離は約六千分一小なり。
- 三. 位置決定法に因る組織誤差及測角誤差等の影響は複雑なるを以て之を略す

原点の値は簡易天測に依り決定したものであり且つ兩原点に於ける鉛直線偏倚も含まれるから豫想以上の精度であつたと云ふ事が出来る而して太洋中にある臺灣の位置に此程度の偏りと振れが有るとしても實際問題に影響する場合は殆ど無いと考へる。

距離の誤差六千分一は三角測量の定誤差としては過大なるため特に研究された結果網の形状や測角誤差等も影響するが主として基線長が過小に測定されたと云ふ結論を得たのである、現今の精密基線測量の誤差は百万分一以下で、簡易基線に於ても十万分一以上の誤差は考へられない然るに六千分の一短く測定されたと云ふ原因は那邊にあるか、當時の測量に就て見るに測定臺は頗る頑丈に出来て居るが二本の杭に打ち付けたる角材の連續にして角材相互の固定が無く其上で基線尺に張力を與ふれば前端の時は後方に向ふ壓力を受け、次の測定には後端となり前方に向ふ壓力を受けるため尺の接續点(水平材の上面に針先にて突きたる点)は依然水平材上にあるも絶對位置は木材と共に移動して間隙が出来る訳で其量を假りに一耗とすれば二十米に對し二万分一となる、又基線尺を水平材上に置き日光に曝したる時の温度と直射を避けて測定したる気温とは相當の差がある、殊に熱帶地に於ては大であるから五度乃至十度の差は有り得る、今假りに五度とすれば二十米に對し約一耗一にして二万分一強の差となる、尚二十米鋼紐尺の長さには通常一耗程度の誤差は免れぬから二万分一短く決定される場合はあり得る、之等三種を綜合すれば約六千分一短く測定されることになる、以上は此測量に對し推定する事の出来る範圍に於て簡単な数字を用ひたものである。

其後「インバアル\*」基線尺が発明され測定法も全く改善されたが、「ヒルガアド」測鋸\*が精密無二の基線尺であつた當時なので簡易測量には専ら鋼紐尺が使用され測定法に多少不備な点があつたとしても止むを得ない事で其のため少々大なる誤差を生じたのであるが臺灣の総面積が一方里の五分の四減少する程度であるから地籍測量に影響せず圖根課の任務は完全に達成されたのである。

測量事業に関しては大体以上述べた通りであるが匪賊あり蕃害あり風土病ありで作業遂行には多くの危険と困難が伴ひ全く想像以上の労苦が拂はれたのである。

僅か十箇月の速成教育を終れば直に出張して獨立作業に就くのであるが内地の様に與点があるでは無し、検査掛の直接指導を受ける機会も無く單獨で假基線を引き関係位置を決定して撰点を始めるのである、根宿はと云へば本部との通信連絡の爲めに附近の市街地を指定されてゐるが實際宿泊するのは地方の民家で土間に蓆を敷き轉寝する外ない、勿論通訳は居らず言葉は通じない只手眞似で相互の気持ちを通はすのだが最初の間は誤解もあり失敗を演ずることも屢あつた而して何れの地方でも土匪の襲撃事件が頻々として起り警察署には五人十人の匪賊が長い足枷に片足を入れ土間に轉がしてある之等が土匪刑罰令に依て処断される数は毎年三千位と聞いてゐた。

前に述べた犠牲者の一人相川技手は觀測の歸途狙撃され一発の彈丸に胸部を貫かれて即死、他の一人本庄技手は交通連絡の兵二名警官二名の一行に加はり礁吧啐から蕃署寮へ移轉の途中約三十の匪賊に襲撃され六発から九発の彈丸を受け何れも戦死されたのである尚二年間の連續出張中二割以上の青年技術者が風土病の爲に斃れて居る之等の思出は次から次と感慨無量なるものがある

既に文化教育の普及したる臺灣は現在南方

進展の重大基地である、今頃土匪や生蕃\*の話は如何にも時代後れではあるが私は何時も事件の突発する一步先を歩いて居り一回も危険に遭遇することなく無事に済んだので其内の一二を述べて此稿を終りたいと思ふ。

教育所を卒業して最初の作業は草鞍墩より亀仔頭北港溪を経て埔里社に入り水社集々より二八水に出づる主点三角鎖で測地の周圍は過半蕃地であつた、蕃界の通路は四五丁間隔に番小屋を設け隘勇\*を配置して警備してゐるがバイバラ社、霧社、カンタバン社等獐猛な蕃人の出草地で銃を携行せざる旅行は不可能な情態であつた。

撰点造標の爲め埔里社の西方三里なる桃仔米に行く途中桃米坑駐在所で民情を調べて見ると多数の生蕃が潜入したと云ふ情報があるから四五日延期した方がよいと忠告された、然し一行は内地人三人人夫五名で小銃二挺あるから十分警戒すれば大丈夫だと判断して其僣侵入した。桃仔米に到着して戸数人口を調べると戸数は一軒半と云ふ其一軒は大きな家で老夫婦に僂僂\*の娘と苦力一人で半と呼ぶ小さな家には夫婦と幼兒三人で合計九人の部落である此大きな家に二泊して造標伐木を完成し埔里社へ歸つた。

其晩生蕃の一隊が襲撃して不具な娘一人だけはどこかに隠れて助かつたが他の八人は寢臺に寝たまゝ押へ付けて首を取られたのである、

觀測に行つた時には入口の細路の左側に四つ右側に三つの棺が並べて埋めてある、其中には首の無い人ばかり葬られて居り、殊に首の無い母親が首の無い乳呑兒を抱てゐる情景は実に悲惨の極であつた。

其夏には北仔店へ移轉して嘉義臺南間の三角鎖を担当した。根宿には総理衙門と書いた大きな看板が掛けてあり此地方の豪家であつた、或夜圖根課長から「明日局長閣下が安溪寮三角

点を巡視されるから検閲を受ける準備をして待て」と云ふ命令を受取つた、翌朝北仔店を出発して安溪寮に到り警察官派出所を訪れて腰掛と湯茶の準備を依頼した、処が派出所では民政長官が臺南から嘉義へ行かれるから其通路を警備せよと命令が来てゐるので此様な処へ寄られる筈が無いと云ふ、成程地方廳に對しては民政長官の巡視であるが吾々に對しては調査局長として三角点へ立寄られることを説明したが、多人数の休憩準備は三十分や一時間で出来る事ではなし既に命令の時刻が切迫してゐるから警備の位置に就くと云ふ様な訳で止むを得ず測站に行き観測準備をしてゐる間に十臺ばかりの手押臺車が見える、すぐ出迎へに行き畑の中を眞直ぐに最近距離を案内した、炎天の中を通路でない所を半里近く歩かせたので一行は汗だく／＼の態であつた。

随員は長谷川鉄道部長\*(勅任官)以下事務官警察部長等三十人近くで三角点へ着いて見れば一本の木蔭もなく、腰を掛けて休むことも出来ず、茶一杯ないのだから相當不満があつたと思はれる、さすがに後藤長官\*は始終温顔を以て我々に接せられ、前田課長の案内で十五米の高測檣に登られた。(續いて四人も五人も登り始めたが檣の上に登り付いた者は一人も無い)一般報告や観測作業は簡単にすませて回光通信の交換をなし檣の上の検閲は約一時間、其間下では長谷川部長が腰掛でも借りて来いと測夫を叱り付ける、駈け足で行つて来た測夫の復命が「幾度行つてもあの警察では貸して呉れません、終り」傍に居た直轄の署長さん苦笑し乍ら「そんなに大きな聲で言ふなよ・・・」と云つたやうな場面が展開された。

検閲が終り派出所で休憩といふことになり警備地から呼び戻された警官は天手古舞であるが洗面器は二枚よりない、三十人顔を洗ふには一時間もかゝる、湯沸しが小さいので一杯づゝの茶が中々間に合はない、

小憩の後出発となり随員の希望により今度は通路傳ひに案内した長谷川部長は馬鹿に遠いと云つて不満を洩らされる、然し後藤長官は「お蔭で嘉義の夕食が旅行中一番の御馳走になります」と笑つて居られた。

此半日のごた／＼騒ぎで派出所員は非常に恐縮され夕食を共にして呉れと眞剣に勧められるので測夫以下全部歸して食事の接待を受けた後まつ暗の中を只獨り歸途に就いた、漸く根宿に歸へり着くや否や「一体どうした」「どうもしない」「若林がやられたに違ひない」といふので憲兵も見へ、警官も見へてみると云ふ騒ぎだ、「一体それはどうしたのか」「安溪寮の派出所が襲撃されたといふ報告が嘉義へ飛ぶ嘉義から測量掛の安否を臺南へ問合せ来る、其内測夫一行が歸り主任官は残留した事を報告すると嘉義に居られる前田課長は益々心配され若林は未だか／＼と電話が頻々として来る」と云ふのであつた、丸で夢の様である。

たつた今のさき食卓を圍んで談笑した其派出所が土匪に襲撃されたのである、民政長官一行が休憩したばかりの直後に起つた事件なので波紋は可なり大きくなつたが此襲撃は数日前から計画されたもので測量検閲には何の関係もなかつたのである、然し如何にも私が出て行くのを待つて居たかのやうに直ぐ其後に突入して乱闘が演ぜられたのである、之を知る由もなく寂静の闇路を辿り根宿に着いた頃には既に二人の警官は戦死し幾人かの負傷者を出して此惨劇は終てみたのである。

### Ⅲ.川名八蔵氏原稿

川名八蔵

・明治十二年生・生徒第十四期・學生第十五期・昭和十六年陸軍技師四等依願免官・現部ノ囑託

(10)測量事業ノ擴大ト令達豫算

川名八蔵

本項ニ関シテハ當部創設以來大正九年迄ノ狀況ハ既ニ沿革史ニ記述セラレ居ルヲ以テ茲ニハ爾後ノ三角科ニ関スル概況ヲ掲グ<sup>1)</sup>、元來測量費ハ基本測量完成ノ為當部設立以來繼續令達セラレタルモノニシテ其額五十萬圓ニ達セシコトアリシモ基本測量ノ進捗ニ伴ヒ逐年削減セラレ事業ノ安定ヲ缺キ暫次不安ノ狀況ニ至レリ

爰ニ於テ昭和六年度ヲ第一年度、昭和三十年年度ヲ終期トスル測量二十五ヶ年計劃ヲ策定シ之カ豫算毎年四十萬圓ヲ要求セリ、爾後概ネ之ニ準據シ令達セラレアリシモ種々ノ理由ニヨリ現在ハ二十六萬圓ニ減セラレタリ、随テ三角科配當豫算モ之ニ伴ヒ減額サレ殊ニ最近ハ物價高騰ノ為作業モ著シク縮小セラルレノ餘儀ナキニ至レリ

然レ共大正十二年關東地方及昭和二年丹後地方ノ震災復旧ノ為特ニ災害費ノ配當竝ニ地震研究所委託費ニ依ル基本以外ノ作業著シク増加シ、殊ニ東京市及ビ地震研究所委託作業ハ今尚繼續セラレ尚三角点移轉改埋モ最近軍事施設ノ増加ニ伴ヒ激増シ之レカ為メ測量費減額ニ依ル作業量ヲ若干緩和ス、其狀況次表ノ如シ

#### (特)北千島三角測量ニ就テ

千島列島中南部ニ屬スル擇捉・國後・色丹島ト北海道本土トノ關係位置ハ三角測量ヲ以テ連絡可能ナルモ得撫島以北占守島ニ到ル其間大小十數個ノ島嶼ハ殆ド一直線狀ニ羅列スルガ故ニ各島ハ單獨ニ經緯度、方位角、基線測量ニ依リ三角及水準測量ヲ爲スノ外ナク從テ年度計劃モ未定ナリシガ明治四十五年水路部ニ於テ軍事上ノ見地ヨリ此等諸島ノ測量ニ着手セラルレ事トナリ初年度ニ占守及幌筵兩島ノ北部測量ノ為水路大技士\*一、技師二、技手二、技生四、外船夫六〇名ヲ以テ一班ヲ編成シ水路大監\*大後五郎氏之ヲ統轄シ測量艦武蔵及警備

兼測量艦浪速ニ搭乘占守島片岡灣ヲ根拠地トシテ作業ヲ開始スルコトナレリ

我ガ測量部ニ於テモ此際水路部トノ協同作業ヲ有利トシ協議ノ結果三角科ニ於テハ中島測量師ヲ主任トシ測量手四、測夫五、人夫二〇名ヲ以テ一分班ヲ編成シ地形科ニ於テハ徳永測量師ヲ主任トシ水路部員ト同時ニ便乘渡航スル事トナレリ其作業年次ハ左ノ如シ

明治四十五年度 占守島及幌筵島北部

大正二年度 幌筵島南部及阿頼度島

同三年度 得撫島南部

同四年度 得撫島北部及温祢古丹島

同五年度 新知島及捨子古丹島

余ハ最初ノ三ヶ年間渡航作業セシヲ以テ其情況ヲ左ニ概述セントス

#### 一、渡航ニ就テ

初年度ニ於テハ標石ハ小樽港碇泊ノ浪速艦ニ積込ミタル後器材ハ根室港ニ於テ武蔵艦ニ積込ミヲ終リ五月十日先發トシテ中島主任外二名ハ水路部員ト共ニ同艦ニ便乘十五日占守島片岡灣ニ到着ス地形科員ハ圖根卓成果、一部出來ル迄約一ヶ月ヲ要スルヲ以テ第二次航海便ニ依ル予定ナリシモ天候其他ノ關係ニ依リ六月一日根室港發七日片岡灣ニ到着ス

#### 二、根據地

片岡ハ占守島ノ西北部ニ在リ全地ニハ北方開拓者タル郡司成忠氏ノ經營ニ係ル奉公義會\*ノ廠舎數棟殘存ス出發前豫メ東京築地ノ同會支部ニ交渉借り受ケ置キタルモノニシテ此等廠舎ニ分宿ス

當時占守島ニハ越年者トシテ奉公義會ニ屬スル男女一七名ヲ算シ冬期ハ主トシテ狐獵ニ従事シ夏期ハ漁業ヲ營ム其大半ハ片岡ノ北方二里別飛沼附近ニ住居ス片岡ニハ海軍貯炭所アリテ番人別所某ハ長年勤續シ其間子女五六名ヲ設ケ之レガ教育ヲ自ラナシ居リシニハ感嘆セリ

#### 三、地形ノ概要

占守島ハ帝國ノ北端ニ位セル一島嶼ニシテ根室港ヲ距ル六八〇海里、一ノ高原段丘島ニシテ島ノ中央三塚山ヲ最高トシ標高一九〇米這松密生ス其廣袤東西四里南北七里南西ハ幌筵海峡一海里ヲ隔テ村上湾ニ相對シ北東ハ占守海峡七海里ヲ隔テ露領東察加「ロバトカ」\*岬ニ對ス

幌筵島ハ占守島ノ南西一海里ヨリ南西ニ横ハリ長サ二五里幅約六里標高一〇〇〇米乃至二〇〇〇米ノ連亘セル山脈縦走シ島ノ北部ニ標高一三三八米ノ硫黄山アリ常ニ硫氣ヲ噴出ス樹木ハ榛ノ木ニシテ寒氣ト積雪ノ為メ直径尺ニ及ブモノアルモ樹幹丈餘ニ達スルモノ稀ナリ

得撫島ハ擇捉島ノ東北ニ位シ東北ヨリ西南ニ延ビ其長サ三十里幅二里乃至五里島ノ中央北岸ニ床丹湾アリ床丹以南ハ一連ノ高山脈縦走シ最高一二〇〇米南端ハ裾野ヲ引キ東岸ハ比較的傾斜緩ナルモ西岸ハ著シク急峻ニシテ溪谷ノ多クハ断崖ヲナス島ノ北部ニ活火山ニアリ其西側ニ温泉湧沸ス

#### 四.港湾

元来北千島列島ハ一大火山系ニ属シ阿頼度島ノ如キハ其形富士山ト彷彿タリ何レ、島嶼モ海岸ハ絶壁ノ所多クシテ港湾ニ乏シク得撫島ハ無人島ナルモ幌筵島ニハ漁場十数个所アリ北部漁場ハ大日本遠洋漁業會社ニ属シ夏期従業員六〇〇人産額一五万円南部漁場ハ千島興業會社ニ属シ従業員一〇〇〇人産額二五万円ナリト云フ

測量作業員ハ物資輸送補充ノ關係上多クハ此等漁場附近ニ根拠地ヲ設ケ多大ノ便宜ト支援ヲ受ケタリ

#### 五.天候及気温

北千島列島ノ北岸ハ「オホウツク」海ニ南ハ太平洋ニ面シ各島分水嶺ヲ界シ兩岸ノ天候著シク異ナリ平均気温ハ五月ニ於テ六度八月ノ十五度ヲ最高トシ九月ニハ低下シテ十度トナ

リ水温ハ之ヨリ五度位低キヲ常トス

天候ノ險惡ナル他ニ比類ナシ作業可能ナルハ全日数ノ五分一ニモ及バス突如濃霧ノ襲来ヲ受クルト全ク文字通り呎尺ヲ辨セズ進退谷マリ止ムナク焚火シツト辛フシテ飢寒ヲ凌グ裡霧消散スルト意外ニモ自己ノ幕舎ハ指呼ノ所ニ在リテ啞然苦笑スルコトナド稀ナラズ或日ノ夕刻ノ出来事造標掛ノ一行幕舎近クニ歸来シテ濃霧襲来進行不能ニ陥リ止ヲ得ズ露営ト決心其準備ニ着手ノ折柄一方幕舎ニ於テハ時折り一行ノ話聲ヲ聴キナガラ中々ニ歸幕セザルニ不審ヲ起シ大聲ニテ何ヲ為シツトアリヤト注意セシニ一行ハビツクリ仰天始メテ我ニ返リタル心地シホツト一息シタト云フ昔話ノ狐附ノ話題ニナリソウナ珍事モアリタリ

測量艦モコレト同様濃霧襲来スレバ已ムヲ得ズ一時假泊スルヲ等屢々ニシテ時トシテ、將ニ暗礁ニ接觸セントスル危險ノ位置ニ在ルヲ判明倉皇避難スルヲアリト云フ曩キニ我等ノ標石運搬方ヲ依頼シタル浪速艦ハ新知島出帆後濃霧ノ襲来スル所トナリ北島第二岬ニ乗リ上ゲ工作船ノ来援アリテ百法手ヲ尽シタルモ遂ニ不幸沈没ノ厄ニ陥リタルハ誠ニ痛惜ノ至リニ堪ヘズ

第二年目渡航ノ際ニハ大和艦ニ便乗国後水道ヲ通過「オホウツク」海ニ出テタルハ五月七日夕刻ナリシガ八時頃ニ至リ艦ハ異様ナル動揺ヲ爲スト共ニ急停止シタリ驚キテ急遽船橋ニ昇リ見レハ一大氷原ニ突入シタルナリ流水ノ大サ数間~数十間ニ及ビ厚サ一間乃至二間ニ達スル者デ潮流ニ從ヒ漂流シツト舷側ニ激突シタルナリ艦ハ漸ク後退シテ危難ヲ避ケ終夜西航シツト氷原ノ南端ヲ迂回シテ更ニ北上セント試ミシモ生憎天候俄然急變悪化シ激浪ニ翻弄サレテ速力ニ湮ヲ出テス一方遙カ前面ニハ高サ数間廣袤十湮ニ亘ル一大氷原ノ横ハルヲ見ル是ニ於テ遂ニ北上ヲ断念スルノ止ムナキニ至リ十一日根室ニ引返シ更ニ霧ハ多ク

トモ流水少ナキ太平洋航路ヲ撰シ悪天候ヲ克服シツツ漸ク占守島ニ渡航スルコトヲ得タリ

#### 六.協同作業ノ状況

本作業ニ於テハ経緯度、方位角及中等潮位ノ測定ハ主トシテ水路部員之ヲ擔當シ基線、三角、水準ノ各測量ハ三角科員、又海図ノ海岸地形図描画ノ資料提供ハ地形科員之ヲ担任シ海上運送ハ全ク水路部ノ援助ヲ受ケル等彼我相扶ケ有無相補ヒ其交情連絡常ニ円満ニシテ地形ノ不良天候ノ險惡モ難ナク之ヲ克服シ以テ所期ノ作業ヲ遂行スルコトヲ得タルハ誠ニ海陸緊密ナル協同作業ノ賜ニ外ナラズ又三角科ニ於テハ特ニ貨物輸送ヲ顧慮シ普通人夫ノ外ニ豫メ船夫ヲ備ヒタリシガ船夫ハ海上作業ニ其能力ヲ十分ニ發揮シタルモ陸上作業ニハ遙カニ人夫ニ及バズ斯クテ各専門ノ役割ニ應ジテソレソレ各自ノ任務ヲ擔當処理シ和親融合以テ円満ニ作業ヲ遂行スルコトヲ得タリ

占守島及幌筵島ノ経緯度ハ共ニ片岡ヨリ發起シ得撫島ニ於テハ特ニ水路部ノ既設経緯度原点ノ値ヲ採用シタリ

初年度占守島作業開始ニ當リ最モ苦心シタルハ地形科員到着セルモ天候不良天測不能ニシテ水路部員ヨリ其成果ヲ受ク能ハザリシコトナリ之レガ爲メ経緯度算出不能ニシテ圖根点ノ成果ヲ得ル能ハズ遂ニ止ヲ得ズ既成海圖上ヨリ天測点并ヒニ著明地点ノ経緯度ヲ圖解的ニ計算シテ之ヲ假定原子ニ採用シ以テ地形測圖ヲ施行シ後新天測成果ニ依リテ其差異ヲ修正シタリ

#### 七.魚族ト熊ニ就テ

魚族ハ豊富ナルコト勿論ニシテ其主ナルモノハ鮭鱒蟹類ナリトス又河沼ニ於テハ岩魚ヲ第一トス一度河ヤ沼ニ釣針ヲ垂レシカ水面上尺餘ニシテ小野東風ノ蛙柳\*ノソレノ如ク直チニ飛ビ上リテ引キ懸カルト云フ有様デ瞬時ニシテ所望ノ獲物ヲ得ルナリ海濱ヤ川沼附近幕営ノ際ハ小網ヲ用ヒ鱒ノ多量ヲ得テ美味ヲ飽食スルヲ常トス

又漁場ニハ何レモ魚類山積シアリテ任意多量ノ提供ヲ默認シ居レリ

熊ハ幌筵島ニ最モ多ク棲息シ某甲手ハ実ニ四頭ト云フ大獵ヲ獲得シタルコトアリ併シナガラ突然ノ遭遇ハ意外ノ危険ヲ招クコトアリ即チ某乙手ハ幕営中其前面小川ノ涯リニテ人夫等昼食中突然一頭ノ熊下流ヨリ姿ヲ現ハシタルニ驚キ悲鳴ヲ上ケナガラ天幕ニ逃ゲ込ミタルニ他一名ノ人夫ハ方向ヲ誤リテ熊トパツタリ遭遇慌テレ反轉セントシタル途端ニ木ノ根ニ躓キ倒レタル刹那忽チ熊ノ足下ニ蹈ミ附ケラレ大騒ギトナリタルヲ以テ直チニ銃ヲ取りテ幕外ニ出ツルヤ先ツ一発射チタルモ命中セズ直チニ再発セント試ミタルモ熊ハ銃聲ニ驚キ山麓目ガケテ姿ヲ没ス幸ヒ被害者ハ眞綿ノ厚胴着ヲ着ケタリシ爲メ僅カニ臀部ニ浅キ爪跡ヲ印シタル程度ニテ危難ヲ免レタリ

余モ熊ニハ数回遭遇セシガ何レモ餘リ近接セザリシ爲メ熊ノ方ヨリ逸早く逃遁シテ幸ニ無事ナルヲ得タルガ只一回遭難事件アリ即チ左記ノ如シ

或ル日造標ノ爲メ人夫三名ヲ伴ヒ海岸ヲ進行中ノコト偶然約二十米ノ絶壁上ニ一頭ノ熊ヲ発見直ニ岩影ニ身ヲ潜メ其行動ヲ監視シテ居ルト彼ハ悠々海濱ニ下リ石ヲ芻ネ起シ餌物ヲ捜シ始メタルヲ以テ崖上ヨリ一撃ヲ加ヘシモノト素早く絶壁ヲ登リタルニ早ヤ熊ノ姿見ヘズ其途端何時ノ間ニカ熊モ我等ト同シ道ヲ辿リテ登リ来タル爲メ茲ニ圖ラズモ正面衝突ヲ現出シ彼ハイキナリ例ノ姿勢タル跪座ヲナシツト泰然トシテ動カス相距ル僅々十五米ナリ余ハ直チニ人夫二十字銃ノ用意ヲ命シ直チニ狙撃ス可ク杖銃ニ装填シ照準セント身構ヘタル折シモ忽チ裏ク人夫ノ上ケタル喊聲ニ熊モビツクリ飛ビ上リサマ一日散ニ山麓目ガケテ姿ヲ没シタルハ如何ニモ遺憾ニモ亦安心ニモ思ハレタリ



自 大正十年度  
至 昭和十六年度  
三角科作業經費一覽表

年度	作業	基本	臨時	維持	災害復旧	委託	移轉改埋	經費																																																																						
十三年	<table border="0"> <tr> <td>樺</td> <td>台</td> </tr> <tr> <td>I 觀</td> <td>I III II</td> </tr> <tr> <td>二一</td> <td>I 水 三四 二七</td> </tr> <tr> <td></td> <td>一三二</td> </tr> </table>	樺	台	I 觀	I III II	二一	I 水 三四 二七		一三二	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>I 水</td> </tr> <tr> <td>三四</td> <td>八六</td> <td>八六</td> </tr> </table>	I 水	IV	I 水	三四	八六	八六	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV 補設</td> </tr> <tr> <td>三四</td> <td>六〇</td> </tr> </table>	I 水	IV 補設	三四	六〇		<table border="0"> <tr> <td>I 觀</td> <td>I 造</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三一</td> <td>二九</td> <td>二六</td> </tr> <tr> <td></td> <td>二〇〇</td> <td>二〇〇</td> </tr> </table>	I 觀	I 造	I 撰	三一	二九	二六		二〇〇	二〇〇	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>III</td> <td>III</td> <td>II</td> <td>I 造</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三二</td> <td>八二</td> <td>二〇〇</td> <td>二〇〇</td> <td>二九</td> <td>二六</td> <td>一〇</td> </tr> </table>	I 水	IV	III	III	II	I 造	I 撰	三二	八二	二〇〇	二〇〇	二九	二六	一〇	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>III</td> <td>III</td> <td>II</td> <td>I 觀</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三五</td> <td>七六</td> <td>一四〇</td> <td>四四</td> <td>五一</td> <td>二</td> <td>三六</td> </tr> <tr> <td>五六</td> <td>六三</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	I 水	IV	III	III	II	I 觀	I 撰	三五	七六	一四〇	四四	五一	二	三六	五六	六三														
樺	台																																																																													
I 觀	I III II																																																																													
二一	I 水 三四 二七																																																																													
	一三二																																																																													
I 水	IV	I 水																																																																												
三四	八六	八六																																																																												
I 水	IV 補設																																																																													
三四	六〇																																																																													
I 觀	I 造	I 撰																																																																												
三一	二九	二六																																																																												
	二〇〇	二〇〇																																																																												
I 水	IV	III	III	II	I 造	I 撰																																																																								
三二	八二	二〇〇	二〇〇	二九	二六	一〇																																																																								
I 水	IV	III	III	II	I 觀	I 撰																																																																								
三五	七六	一四〇	四四	五一	二	三六																																																																								
五六	六三																																																																													
十二年	<table border="0"> <tr> <td>樺</td> <td>台</td> </tr> <tr> <td>I 觀</td> <td>I III II</td> </tr> <tr> <td>二一</td> <td>I 水 三四 二七</td> </tr> <tr> <td></td> <td>一三二</td> </tr> </table>	樺	台	I 觀	I III II	二一	I 水 三四 二七		一三二	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>I 水</td> </tr> <tr> <td>三四</td> <td>八六</td> <td>八六</td> </tr> </table>	I 水	IV	I 水	三四	八六	八六	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV 補設</td> </tr> <tr> <td>三四</td> <td>六〇</td> </tr> </table>	I 水	IV 補設	三四	六〇	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>III</td> <td>III</td> <td>II</td> <td>I 造</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三一</td> <td>八二</td> <td>二〇〇</td> <td>二〇〇</td> <td>二九</td> <td>二六</td> <td>一〇</td> </tr> </table>	I 水	IV	III	III	II	I 造	I 撰	三一	八二	二〇〇	二〇〇	二九	二六	一〇	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>III</td> <td>III</td> <td>II</td> <td>I 觀</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三五</td> <td>七六</td> <td>一四〇</td> <td>四四</td> <td>五一</td> <td>二</td> <td>三六</td> </tr> <tr> <td>五六</td> <td>六三</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	I 水	IV	III	III	II	I 觀	I 撰	三五	七六	一四〇	四四	五一	二	三六	五六	六三																									
樺	台																																																																													
I 觀	I III II																																																																													
二一	I 水 三四 二七																																																																													
	一三二																																																																													
I 水	IV	I 水																																																																												
三四	八六	八六																																																																												
I 水	IV 補設																																																																													
三四	六〇																																																																													
I 水	IV	III	III	II	I 造	I 撰																																																																								
三一	八二	二〇〇	二〇〇	二九	二六	一〇																																																																								
I 水	IV	III	III	II	I 觀	I 撰																																																																								
三五	七六	一四〇	四四	五一	二	三六																																																																								
五六	六三																																																																													
十一年	<table border="0"> <tr> <td>樺</td> <td>台</td> </tr> <tr> <td>I 觀</td> <td>I III II</td> </tr> <tr> <td>二一</td> <td>I 水 三四 二七</td> </tr> <tr> <td></td> <td>一三二</td> </tr> </table>	樺	台	I 觀	I III II	二一	I 水 三四 二七		一三二	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>I 水</td> </tr> <tr> <td>三四</td> <td>八六</td> <td>八六</td> </tr> </table>	I 水	IV	I 水	三四	八六	八六	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV 補設</td> </tr> <tr> <td>三四</td> <td>六〇</td> </tr> </table>	I 水	IV 補設	三四	六〇	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>III</td> <td>III</td> <td>II</td> <td>I 造</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三一</td> <td>八二</td> <td>二〇〇</td> <td>二〇〇</td> <td>二九</td> <td>二六</td> <td>一〇</td> </tr> </table>	I 水	IV	III	III	II	I 造	I 撰	三一	八二	二〇〇	二〇〇	二九	二六	一〇	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>III</td> <td>III</td> <td>II</td> <td>I 觀</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三五</td> <td>七六</td> <td>一四〇</td> <td>四四</td> <td>五一</td> <td>二</td> <td>三六</td> </tr> <tr> <td>五六</td> <td>六三</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	I 水	IV	III	III	II	I 觀	I 撰	三五	七六	一四〇	四四	五一	二	三六	五六	六三																									
樺	台																																																																													
I 觀	I III II																																																																													
二一	I 水 三四 二七																																																																													
	一三二																																																																													
I 水	IV	I 水																																																																												
三四	八六	八六																																																																												
I 水	IV 補設																																																																													
三四	六〇																																																																													
I 水	IV	III	III	II	I 造	I 撰																																																																								
三一	八二	二〇〇	二〇〇	二九	二六	一〇																																																																								
I 水	IV	III	III	II	I 觀	I 撰																																																																								
三五	七六	一四〇	四四	五一	二	三六																																																																								
五六	六三																																																																													
十大正	<table border="0"> <tr> <td>樺</td> <td>台</td> </tr> <tr> <td>I 觀</td> <td>I III II</td> </tr> <tr> <td>二一</td> <td>I 水 三四 二七</td> </tr> <tr> <td></td> <td>一三二</td> </tr> </table>	樺	台	I 觀	I III II	二一	I 水 三四 二七		一三二	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>I 水</td> </tr> <tr> <td>三四</td> <td>八六</td> <td>八六</td> </tr> </table>	I 水	IV	I 水	三四	八六	八六	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV 補設</td> </tr> <tr> <td>三四</td> <td>六〇</td> </tr> </table>	I 水	IV 補設	三四	六〇	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>III</td> <td>III</td> <td>II</td> <td>I 造</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三一</td> <td>八二</td> <td>二〇〇</td> <td>二〇〇</td> <td>二九</td> <td>二六</td> <td>一〇</td> </tr> </table>	I 水	IV	III	III	II	I 造	I 撰	三一	八二	二〇〇	二〇〇	二九	二六	一〇	<table border="0"> <tr> <td>I 水</td> <td>IV</td> <td>III</td> <td>III</td> <td>II</td> <td>I 觀</td> <td>I 撰</td> </tr> <tr> <td>三五</td> <td>七六</td> <td>一四〇</td> <td>四四</td> <td>五一</td> <td>二</td> <td>三六</td> </tr> <tr> <td>五六</td> <td>六三</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	I 水	IV	III	III	II	I 觀	I 撰	三五	七六	一四〇	四四	五一	二	三六	五六	六三																									
樺	台																																																																													
I 觀	I III II																																																																													
二一	I 水 三四 二七																																																																													
	一三二																																																																													
I 水	IV	I 水																																																																												
三四	八六	八六																																																																												
I 水	IV 補設																																																																													
三四	六〇																																																																													
I 水	IV	III	III	II	I 造	I 撰																																																																								
三一	八二	二〇〇	二〇〇	二九	二六	一〇																																																																								
I 水	IV	III	III	II	I 觀	I 撰																																																																								
三五	七六	一四〇	四四	五一	二	三六																																																																								
五六	六三																																																																													
基本																																																																														
臨時																																																																														
維持																																																																														
災害復旧																																																																														
委託																																																																														
移轉改埋																																																																														
經費																																																																														

四年	三年	二昭和	十五年	十四年	
樺 I 観 二〇 II 造 四 III 撰 五 内地 I 水 一四 II 水 五二 台地 I 水 九六 II 水 三六八	樺 I 撰 六 II 造 一〇 III 観 六五 樺 I 水 二六五	樺 I 撰 六 II 観 二二 III 撰 十三 I 水 二二六 II 水 二六三 III 水 一八	樺 I 撰 三 II 造 一 III 観 七 I 水 一三九 II 水 二〇七 III 水 六二 基線 一	樺 I 観 二一 II 撰 四 III 撰 三 I 水 二二 II 水 九六 III 水 一七	基本
				IV 補設 一三六	臨時
標石調査 二〇二 復旧 I 水 三二二 II 水 五三	標石調査 二二七 復旧 I 水 二一九 II 水 五七	復旧 I 水 七四 II 水 三二	標石調査 六三六 復旧 I 水 五一	標石調査 四一	維持
丹後 I 水 二二〇 II 水 四七〇	丹後 I 観 二五 II 撰 五二 III 撰 五一 一水 一、二四	丹後 I 撰 三六 II 撰 七九 III 撰 一七 基準水	I 観 二 II 撰 三八〇 III 撰 四七〇 I 水 三鷹村方位角	I 撰 五 II 撰 二一 III 撰 四〇七 I 水 九二五 II 水 一三九	災害復旧
多角 I 水 四四七 II 水 八九	I 水 二五九	丹後 I 撰 二七 II 撰 五二 新潟 I 水 二六二	I 水 一三三		委託
改埋 三二	改埋 三〇	改埋 三三	改埋 二九	改埋 二〇	移轉改埋
基本 一〇五、七六四 維持 一四、七〇〇 災害 一、一五六 委託 一、二四八 移轉 一四〇、八八一 計 一、四〇、八八一	基本 九四、五五一 維持 四、一〇〇 災害 四、六〇〇 委託 一、一六〇 移轉 一、六〇五 計 一、五〇、〇一六	基本 九八、〇二九 維持 二、〇〇一 災害 二、二六〇 委託 二、一九八 移轉 一、四八二 計 一、四八、六八二	基本 一一二、四八八 維持 五、四六一 災害 一、七〇〇 委託 一、五〇〇 移轉 一、一四九 計 一、六八、一四九	基本 七八、一一九 維持 八二、七三八 災害 一、七五七 委託 一、六二六 移轉 一、六一四 計 一、六二、六一四	經費

九年	八年	七年	六年	五年	
樺 台 III I III II 水      水 八二 七八 一六六 三九	樺 台 III I III II 水      水 三九 九五 九七 二二三 三三	樺 台 III II I I III 水      水 八〇 三六 二 一六八 二二三	樺 I III II 水      水 一三〇 一二九 七〇	樺 台 III I III I 観 水      水 七六 六八 二三四 一五	基本
静岡三角 二二	I 水 八六	I 観 一〇	設 元山験潮場新	I 水 六六六 I 造 五(饗庭野)	臨時
復旧 二五九	復旧 一五四	復旧 一二三	I 水 復旧 一六一 一六	復旧 八九 標石調査 三四六	維持
I 水 四七九	I 水 七〇六 II 二六 I 観 一〇		伊豆 I II I 天文 水      水 一 一八四 二九 九		災害復旧
I 水 五二〇	I 水 五八二	I 水 一四九八	I 観 四 I 水 八〇二	II 二一 I 造 一〇 I 水 五二四	委託
改埋 四八	改埋 八〇	改埋 一〇三	改埋 七一	改埋 五六	移転改埋
計 移転 委託 災害 維持 基本 一〇七、一三四 二、二八五 七、七〇〇 六、〇〇〇 三、九四九 八七、二〇〇	計 移転 委託 災害 維持 基本 二一八、三七六 三、六九三 八、〇八二 一八、三四五 四、三一二 八三、九四四	計 移転 委託 災害 維持 基本 一〇四、五九五 四、六三二 一六、三八二 三、九三一 七九、六五〇	計 移転 委託 災害 維持 基本 二一、六九六 三、一七六 一九、九〇〇 一三、三〇〇 四、五二〇 八〇、八〇〇	計 移転 委託 災害 維持 基本 一三六、八三六 二、二三七 二〇、二三七 二、五五七 四、五二二 一〇九、五二二	經費



十六年	十五年	
朝 I I I I 水 観 造 撰 五七 一 一 七 一 九九 〇 〇 四 〇	朝 樺 I I I I I I 水 造 撰 水 Ⅲ Ⅱ 二六 五 一 二 二 一 八七 七 九 〇	基本
磁気儀検定	磁気器検定 I 水 四五七	臨時
復旧 標石調査 二、三〇三 一七三	復 Ⅱ I 男鹿半島 八 六 六	維持
		災害復旧
三角 I 水 六七七 一〇	Ⅲ Ⅱ I 水 三角 三〇九 五九	委託
改埋 四一	改埋 四九	移転改埋
計 移 委 災 維 基 転 託 害 持 本 九七、五 一四、二五 一八、〇八 五八、九五 〇〇五 七三四 八八	計 移 委 災 維 基 転 託 害 持 本 一〇二、四八 八、三七 一四、一六 七五、八三 八八三 五〇六 九	經費

備考 一、本表ハ三角科業務年報ヨリ蒐集  
二、臨時經費ハ基本經費中ニ含有ス

#### IV. 元陸地測量師矢島守一杉山正治両氏之遺績録

元陸地測量師矢島守一杉山正治両氏之遺績録

記録者 囑託 平木安之助

各方面ヨリ資料若干ヲ得テ平木囑託ガ纏メタリ

元陸地測量師矢島守一氏之遺績

##### 第一 前書キ

矢島守一氏ハ旧金澤藩士夙ニ一般武藝ノ外ニ算算ヲ學ビ維新ノ際、同藩最初ノ軍艦建造セララルトヤ直チニ其乗組役ヲ命セラレ各地巡航、江戸湾迄航行シタルコトアリト其間ニ修得シタル天測ニ関スル素養ト技能ハ他日陸軍測量最初ノ技術官トシテ各種測量就中天測ニ関シテ後進ノ教育指導ニ與ツテカアル基因トナレルガ如シ維新後帝大ノ前身開成學校ニ教鞭ヲ取り間モナク陸軍測量ニ勤務茲ニ初代部長小菅智淵氏地形科長関定暉氏及製図科長早川省義氏ト共ニ陸軍測量創設當時ニ於テ互ヒニ相倚リ相扶ケテ日夜精励諸般ノ計画研鑽ニ满腔ノ心血ヲ注ギ拮据經營遂ニ我国測量事業ニ對シテ確固タル基礎ヲ建設スルノ偉業ニ參與セラレタル功績ハ実ニ顯著ナルモノト云フベシ後明治十七年頃ヨリハ初代三角科\*田坂虎之助氏ノ信任ヲ蒙リ杉山正治氏ト共ニ協力科長ヲ補佐シテ三角測量諸般ノ業務ノ為ニ創意考案周到緻密ノ研鑽討究ヲ経テ以テ今日見ル所ノ三角測量業務ノ方式実行法ヲ形成スルニ至リシ功績亦大ナルモノアルヲ見ル抑モ精密器械ニ對スル操作ノ際ノ信念ト姿勢ノ心構ヘハ蓋シ同氏ノ武道ニ於テ鍛鍊セラレタル方式ヨリ案出セラレテ以テ今日履行スル所ノ觀測態勢ヲ形成シタルモノナルガ前途猶不易ニ繼續セラル可キモノト思考ス同氏ガ在職中最モ苦心努力ヲ傾注セラレタルハ関東平野ノ一、二等三角測量ニシテ此時期ニ於テ同氏ノ苦心研究ニ成レル高規標ノ構造規格ハ副期的進歩ヲ與ヘタル觀アリ一等觀測ニ於テ重要ナル回光燈、制光板ノ創作并ヒニ回光通信々号ノ制定モ殆ンド

同氏ノ考案努力ニ負フ所多シ彼ノ日露国境副定事業ノ測量主任トシテ國際的ニ赫々タル且光榮アル偉功ヲ建テラレタル事ハ餘リニモ有名ナリ今般不肖命ニヨリテ同氏并ヒニ杉山氏両先輩ノ遺績記録ニ當リ両氏ノ人格業績ノ餘リニモ偉大ナルニ對シ意足りテ文拙ク十分ニ此重責ヲ全ウスル能ハザルヲ遺憾トシ且ツ恐懼ニ堪ヘザル次第ナリ

##### 第二 官歴沿革

・石川縣士族弘化二年十二月生・明治七年二月十一等出仕(陸軍省)・同月征討總督隨行・同十年征討軍附戰地經歷測量・同十九年五月陸軍六等技師七月八日正八位・同二十一年五月陸地測量部班員・同二十六年十二月勲六等瑞寶章・同三十五年二月班員ヲ免シ班長ヲ命ス・同三十九年四月一日三十七八年戰役ノ功ニ依リ勲四等瑞寶章・同四十一年七月樺太境界副定委員ノ職ヲ奉シ尽力尠カラズ依テ旭日小綬章ヲ授ケ賜フ・同四十四年十月從五位十一月高等官四等依願免本官

##### 第三 顯著ナル業績

・明治七年已ニ參謀局測量課ニ勤務シ測量測図ノ草分時代ヨリ斯業ニ專念後年一時帝大出身ノ中原、二見両氏新智識ヲ携ヘテ参加シタルモノト素ヨリ天測ヤ測量ノ實地經驗ナク只管外国書ノ翻譯ニ没頭スルノ有様デ間モナク何レモ他ニ轉出シ明治十七年田坂初代三角科長カ独逸国陸軍測量法ヲ學ビテ歸朝就任セラレシモ是亦実行上ノ經驗ハ不十分ナリシト想像サルト杉山氏ガ同氏ヨリ基線測量主任ノ職務ヲ引継キタルハ明治二十九年、須坂基線\*ヨリノコトナゾヲ想察スレバ創業以來実ニ二十有余年ニ亘ル三角科業務ノ一切ハ殆ンド拳ケテ之ヲ同氏ノ不撓不屈ノ研究心ト努力精励ノ結晶ニ由リタル觀アリ今日三角科各測量業務ノ一切ノ方式実行法ニ於テ同氏ノ息ノ掛カラヌモノハ皆無ト云ツテ可ナランカ

- ・天文測量ト基線測量ハ殆ソド矢島氏ハ創業時代ヨリ之ニ参加シ明治二十九年頃ニ至リ始メテ此事業ヲ氏ガ最モ信頼セル後進ノ杉山正治氏ニ引継タリ此時代ノ基線尺ハ米国「ヒルガード」式ノ極メテ取扱不便ナルモノニ拘ラズ後年進歩セル優秀各基線尺ト其精度ヲ比較ノ結果毫モ遜色ナキヲ確認セラレタリ該基線尺ノ比較作業及実測作業ニ於ケル間ハ昼夜ニ亘リ最モ奮励努力ヲ要シ実ニ文字通り所謂不眠不休ノ劇務ニシテ其時代ノ基線測量ノ属員ガ異口同音ニ「一度ハ行ク可シ二度ト遣ルベキ仕事ニアラズ」ト溜息ヲツク程ノ難作業ナリシト云フ而カモ全氏ガ一度此作業ニ着手スルヤ没頭専念一切無我夢中トナルヲ常トス彼ノ有名ナル話題タル基線比較室内ニ偶々巡視セラレタル藤井部長\*閣下ニ対シテサヘ大喝シツト室外退去ヲ迫リタルヲ見テモ一般ヲ推察スルニ足ル此ノ如ク操作不便ニシテ非常ノ努力ヲ要スル「ヒルガード」式基線尺ノ用途ガ恰モ難作業克服ニカケテノ二大勢力家タル矢島、杉山両氏時代ヲ以テ終焉ヲ告ケタルモ亦奇縁ト云フベシ
- ・同氏ハ又一等三角測量事業ノ功勞者トシテノ第一人者タリ明治十六年該事業創始以来後年一時、関東平野ノ二等三角ノ検査掛勤務期間ト例ノ日露国境測定事業ニ参加サレタル期間ヲ除クノ外ハ或ハ測量掛トシ或ハ検査掛又ハ班長トシテ終始一貫斯業ニ従事遂ニ四十四年末退官ニ至ル迄実ニ三十年ノ久シキニ亘リテ勤續セラレ其間器械ノ使用法規標ノ構造法等微ニ入り細ニ及ビ独特ノ研究考察ニ依リ以テ今日ニ及ブ所ノ確固不動ノ方式実行法ノ完備ヲ見ルニ至リ且回光燈制光板及回光通信々号法ノ制定モ同氏ノ考案ニ依ルモノニシテ斯業ニ対スル同氏ノ功績ハ筆紙ニ尽シ難キ感アリ
- ・明治三十年乃至三十四年ニ亘リ冬期不休ノ連

続作業ニ依リタル関東平野ニ於ケル二等三角測量中ノ同氏ノ努力モ亦同氏ノ永キ在職中ノ一大難事業タルニ足ル抑モ測量創始以来其進程状況ハ先ツ東海道ヨリ近畿中国九州ヲ経テ始メテ関東地方ニ着手セリ是レ該地方ハ正式測量実施前需要ニ迫ラレ應急トシテ迅速ニ二分一畧測圖\*施行セラレタルニ依ルモノナルモ一方該地域ハ本邦最大ノ平坦地ニ属シ而モ巨木大樹繁茂シテ視通ヲ障碍シ三角測量トシテハ最モ至難ナル地形ニ属スルガ故ナリ是レヨリ先、平坦陰蔽地トシテ濃美平野、肥筑平野等アリシモ部ノ方針トシテ規標ハ高測櫓ヲ避ケテ成ル可ク障碍樹木伐採方法ヲ襲蹈シ来リシガ時勢ノ進進ニ伴ヒ一般民心ノ政治民権思想ノ發達向上ニヨリテ伐木ヲ嫌忌拒絶スルノ風昂マリ遂ニ関東平野着手ニ當リ従来ノ方針ヲ變ヘテ高規標建設方法ヲ断行スルヲ決定セラレ已ニ一等三角点ヨリ此方法ヲ実施シタルモ其辺長大ニシテ配点粗少ナルヲ以テ著シキ影響ヲ見ザリシガ愈々二等三角実施ニ至リ茲ニ大規模ナル大陰蔽平野ノ造標伐木作業ト云フ三角科未曾有ノ難作業ニ逢著スルニ至レリ

二等三角測量當該班ハ第三班ニシテ班長ハ歩兵大尉前田前氏(後台湾土地調査局測量課長ニ任シ又日露役ニ現役少佐トシテ出征遼陽會戰ニ於テ壯烈ナル戦死ヲ遂ラル)検査掛トシテ特ニ矢島守一氏ヲシテ之ニ當ラシメラレタルハ蓋シ此難作業ノ遂行ニ上司ガ如何ニ重大視セラレタルカヲ知ルニ足ル前田班長ハ豪放闊達ノ士自ラハ概ネ在京班ノ一般事務ニ任シ外業現地事務ハ拳ケテ之ヲ検査掛ニ一任シ以テ矢島氏ヲシテ自由ニ其手腕ヲ發揮セシメラレタリ

班員ハ第二期ノ一部ニ第三期ノ殆ソト大部分ニシテ其数約十五名当時三角科ノ中堅ヲ網羅シタル觀アリタリ而シテ作業着手以来

四季ヲ通スル連續強行難作業ニシテ主トシテ高測櫓ノ建設ト大伐木作業ニ屬シ為メニ官民ト面倒ナル交渉事務及従業員ノ負傷事件等絶ヘス発生シ是レガ処理ニ矢島氏ノ業務ハ一段ト複雑多端ヲ極メ班本部ニハ日夜数名ノ班員従業員ガ詰掛ケルト云フ光景ヲ呈シタリシガ此繁劇裡ニ在リテモ同氏ノ性質トシテ諸般ノ計画実施ハ最モ精緻正確ヲ極ムルヲ常トシ班員ヘノ命令指導等逐一厳密ト懇切ヲ極メ從而其多忙ナルコト名状スベクモアラズ而カモ勢力絶倫當時已ニ五十五才ヲ超フル老齡ナルニ拘ラズ其根宿ニ於ケル動作ハ全然廳舎ニ於ケルト全様整然ト洋服ヲ着シ端然トシテ劇務ヲ処理シ日夜連続執務、疲労到レバ僅カニ机ニ倚リテ假眠スルノミニテ入浴モ臥床ヲモ廢スルヲ数日ニ及ブコト珍シカラス実ニ同氏ノ永キ在職中最モ多忙ニシテ最モ苦勞セラレタルハ此時期ナリシト云フ

・矢島氏ノ永ノ在職中最モ華ヤカニシテ且ツ光榮ナル任務ハ日露講和條約ニ伴フ樺太境界測定事業ニ於ケル日本側委員トシテノ業績ナリトス當時測量技術官ノ主任トシテ測量各官ノ統轄指導ハ勿論、其他測量全般ノ計画実施等ハ一トシテ氏ノ副策ニ非ラザルモノナク氏モ我邦始メテノ國際的此重要測量事業ニ對シ如何ニ渾身ノ智ヲ絞リ勇ヲ鼓シテ之ニ當ラレシヤハ想像ニ餘リアリ嘗テ其幕舎ニ内業中山火將ニ身辺ニ及バントシテ猶作業ニ没頭此椿事ニ對シテ全く無我ノ境ニアリタリト云フ一事以テ當時ノ動靜ヲ窺フニ足ランカ、斯クシテニケ年ニ巨ル業績滞リナク完成シ松村少佐\*（後チノ測量部長）ト共ニ浦塩ニ出張露国當事者ト關係書類ノ交換ヲ了ヘテ歸朝間モナク大島委員長\*（現枢密顧問官）以下各委員ト共ニ參内親シク謁見ト御陪食ノ破格ノ光榮ニ浴セラレタルコトハ平素忠君愛國ノ至情熱烈タル同氏カ此優渥ナル天恩ニ對シ如何ニ感激セラレシヤハ蓋

シ筆舌ニ絶スルモノアリタラン

#### 第四 矢島氏ニ関スル逸話

(1)樺太境界測量中某日暴風に連れて俄然猛烈なる山火が委員幕舎に向つて襲来するあり大島委員長以下舎外に集合して避難の準備をなされたり独り委員矢島測量師は幕舎内に在り測量計画に熱中し盛に思索を凝らし居られ外間如何なる事変勃發するも先生更に御存じない委員長は副官に急命して老測量官を拉し来らしめられた。これでは家を移して妻を忘る如きは低次の忘れ方である

(山田又市)

(2)矢島翁に多年配属せしめられし測夫松井松五郎が或る年の一等三角觀測に私に配属されたことがあつた、たしか戸來岳一等補点の觀測の時であつたと思ふが、松井を郵便連絡に十和田湖畔の根宿へ下山せしむるとき「おごるから雞を一羽見つけて来てくれるやう」に頼むだ、やがて「この様な上物がありました」と尾の方を此方らに向けて見せました、それはカシワのメスでいかにもよい雞でありました「下で料理して来ればよかつたらうに」といひますと「さうですーそれなら大へん自分等に都合がよいのですが」と前置して矢島翁が雞所望のときの條件を次のやうに話すのであります。

1. 雞はカシワで二歳以内のメンドリ
2. シメないで持つて来て尾の方をコチラに向けて見せること
3. それからなき聲のきこえぬ所で料理すること

かくて翁は全量の十分の一にも足らぬ程を自用の小鍋にとられ「あとはサツマ汁にして皆でたべるやうにとお渡しになつたとのことであつた。1.は肉味の鑑識で何でもないが2.と3.は翁が如何に切々たる惻隱の至



情に富ませられしかを想ふに足るであらう  
(古田和三郎)

(3) 関東平野二等三角検査掛として活動中或時千葉方面より乗車市川駅に下車すべきを何か考へごとをして居た爲終点の當時の本所駅\*迄乗越してしまつた生憎下りの終列車の発車後なので駅附近の宿屋に泊り翌朝一番で市川へ引返された、本所に来て自宅に帰る意志のないと云ふことは公私の區別を厳守するゝ所謂矢島式か

(4) 同じ頃の話なるが或る日次男君\*(當時商大生\*後年堀越商會の支配人として日米貿易に活躍した人)家事上の相談ありて出張先の宿舎に老父を訪れた、之に対して、留守中の家事は一切母に任せてある母に相談せよとて面會を許さず次男君大聲一番親爺は莫迦だと捨臺詞で帰京したと

(5) 出張先より嘗て一度も土産物を持つて歸つたことがない夫人が一度恐る／＼子供も大勢居ることだし偶には印ばかりなりと出張先の産物を御持ち歸りを願いますと申された処、丈夫で歸つて来る此身体が何よりの御土産だと答へられた

(以上(3)(4)(5)は山本耕夫氏より聴いた話、  
佐々木利正)

(6) 某氏は家事用の爲早退を矢島班長に願ひ出るのに眞の事情が言ひ憎いので子供が病氣だとうつかり辨解して置いた翌日出勤すると班長はいと叮嚀反覆詳細に病状を尋ねられ、それが眞心籠めて御心配の様子あり／＼と見ゆるので恐懼の餘り冷汗背を冷すものがあつた、矢島さんには全く嘘は言はれぬと某氏より聞かされたことがあつた

(佐々木利正)

(7) 山形縣内塩野原基線測量中の出来事或る測夫が十三糎経緯儀を近距離運搬なりとて迂闊にも常規に反し外箱の革紐を片手に

摺み経緯儀を手ぶらにして運びたるを見附け大喝一聲驚き戦のく測夫に命して其操作の通りに原位置に運搬させ嚴重に其不心得と器械を尊重すべき理由とを懇々と説明訓戒の後更めて正式の運搬を遣り直さしめた蓋し同氏程器械ヲ尊重する精神の熱烈なる人は他に之を見ざる所なり  
(梅津武雄)

(8) 水準原點及點檢室、比較室は何れも矢島氏の考案設計に成るものと聞く比較室は米国「ヒルガード」式基線尺の準尺と A.B.C. 三基線尺とを比較測定を行ふべき室にして之に適する様に完全なる装置を施しありて同氏が此室内に籠りて作業中は室を密閉して火鉢数個に蒸氣を發せしめて各種温度に於ける嚴密なる比較測定を行ふにありて同氏は室内の保温と器械の微動を避くる為め定員外の出入を嚴禁しつゝ文字通り無我夢中之に没頭專念するを例とせり藤井部長閣下一度作業を視る可く突然室内に入らるゝや同氏は大聲叱呼直ちに退出を迫りて止まず閣下も同氏の性質を熟知せらるゝことゝて矢島は丸で氣狂い見た様だと呟きつゝ退出せられたとは有名の話にして一面斯く熱心ならこそ一酷の同氏を部長科長も信任せられたるものと思はる

(9) 矢島氏の性格は丸で古武士の風貌が多分に存在し言語動作の明晰端正なる自然に頭の下る思ひあり就中公私區別の嚴格なることは誰人も感嘆敬服する処なるが同氏の解釋に依れば旅費は出張中必要なるの故を以てお上より支給さるゝものなる以上之を残して私用に供するとか土産物を購ひて持ち歸るなどは不都合千万十分に慎しむべきことなりとて旅館の茶代、掛員や測夫への土産心附等には惜まず之を使用し尽されたりと聞く

(8)(9)二項松尾義男)

(10)明治四十年頃だつたと思ふ私が初めて第二班附との部署に接した時、前年同班附一等の副手を勤めた某氏が私に向つて注意するには「君矢島班長は毎朝班員の誰よりも早く出勤して各員の出勤時刻を実査し+10-5等と遅速の分数を入念に記帳して置かれる多分は賞與并ひに進級の参考に供さるゝものと思ふ」之を聴くや私は入班の翌日は班長の出勤時を豫測して定刻より約二十分早く出勤して見た班長は幸に五分後れの十五分前に出勤せられた翌日は五分奮発して二十五分前に出勤すると班長も丁度五分速めて二十分前に出勤された此れは際どひ危いぞといよ／＼用心して三日目には三十分前に出ると班長も果して五分早く二十五分前に来られた此観測の結果によりて班長の時刻変化量は整然たる等差級数なので其公差確守の意味で四日目には三十五分前に出勤する積りのところ遺憾ながら間に合はず前日全様の三十分前に出勤したところ丁度班長は人力車で到着せられたところではつたり同着となつてしまつた最早や自分の出勤時を突止められたからには競争無益と思ひ其後は概ね十五分前に出勤することゝしたら班長も同様相前後して出勤される様になつた班長の負けず魂と万事数理的統計的に打算せらるゝ極端の性質は遂に山本米三郎の二等原簿改竄事件といふ矢島氏一生一度の失策事件も起きたのである(因に山本は全期生中の逸材内外業共嘗て人後に落ちたることなし二等三角測量の不正行為発覚して免官となつた)

(臼井由清)

(11)矢島班長は非常の勉強家にして役所にありては殆んど公務に没頭し家庭にありては読書研究に専念し遂に殆んど独學にて

非凡の人材となられたる次第なりと聴く一方中々の子福者で三男三女を設けられ爲めに修養を妨げらるゝこと尠からず芝区明舟町住居時代には多く土蔵に引籠り一切家族の出入を禁じて思索に耽けられたりと

(12)関東平野二等三角出張中藤井測量部長の巡視あり其時作業上に就き端なく意見の衝突を來たし宿舍と作業現場との往復途上にて亦宿舍にありては食事時間外には同じ問題に就き議論續行互ひに譲らず遂に決論に到達せずして部長は只一言矢島の頑固には困ると呟きつゝ一泊の上帰京せられたり二日一夜に亘る大論戦は同氏ならこそで他の誰もが及びも附かぬことなり藤井閣下が忍耐と寛容の態度を以て矢島氏に対応せられたることは全く同氏の作業に対する熱烈なる忠勤の人格を深く信頼せられたるに因ること勿論なり

((11)(12)二項は當時班員間の話題)

(13)同氏は極めて衛生上の実践家で之に関する智識も豊富であつた班員や出張先の誰彼を問はず機會ある毎に健康法に就て淳々として説き不摂生を戒められた殊に暴飲暴食は自殺行為なりと痛言された御本人自身全く健康家であつた五十歳頃一時座骨神経痛にて腕車にて通勤せられたることある外は病氣欠勤は殆んど皆無であつた酒は如何なる場合と雖も杯四五ハイを出です喫飯専用として軽く三パイ入の大茶碗を家庭は勿論旅館や野營の幕舎にも携行し之に軽く山積りしたるを定量とし如何に疲労空腹の際でも決して此定量を超過することなし而して十分に咀嚼を厳守せられ人に向つても此咀嚼法勵行を熱心に勧められた。

(14)自分が一等観測掛であつた頃執務中の喫烟を非常に嫌はれた内業中喫烟すれば必

す班長に呼び付けられて直接間接に小言を食ふ烟草好きの班員は心得ていよ／＼堪へられなくなると、さも忙しそうな態度を示し右手に帳簿を披くやら算盤を撥くやら作業の体勢を崩さぬ様にして左手で素早くそつと喫烟し以て班長の鋭眼を避くるを常とせり班長一同に向つて次の様に言はれた事があつた「喫烟を敢て責むるにあらず責任ある官吏が業務中休烟の辛抱が出来ない程意思の薄弱を責むるにあり予も烟草は人並以上に大好きなり只右の趣意にて役所や其他公人たる間之を忍ぶのみにして家庭に在りては烟毒薄き刻烟草を愛用して居る」と促し班員の多くは此家庭喫烟の件は信するものが無かつたようだ、所が明治四十二年春我等一等観測主任四人(山田、中島、河合、平木各測量師)に向ひ班長は「自分も本年限りで数十年関與したる一等観測とも別を告げるかも知れぬ其爲め昨年全様又復君等四人に引続き本年度の作業を担任せしむることとした最期の花を咲せる積りて一層の努力を望む前祝ひに晚餐を共にせん」とて自邸に招待を受け老夫婦の心からなる歓待を受けた其際班長は長烟管を以て頻りと刻烟草をさも甘そうに満喫し居らるゝを目撃し前言の詐りならざるを知り且つ班長の節制の厳格なるに一層感じ入つたのであつた

(15)同氏は頗る能筆にして而も如何に取急きの際なりとも公文書は素より普通の書翰に至る迄整然としたる所謂御家流風の名筆を揮ひ殊に細字に於ては恰も印刷せるか如き筆法を用ひられ此筆法は後進杉山、三輪、田浦の各測量師に傳はり其頃三角科の各計算簿記入ペン字は矢島式を以て模範となしたる観あることは當時の各計算簿を通覧すれば直ちに之を首肯するを得

るなり

((11)乃至(15)各項平木安之助)

一、明治四十一年の春であつた。鳳山丸\*は敦賀湾頭を壓して盛んに烟を吐いて居る、此方棧橋には颯爽たる一將軍と三四の將校、四五のフロックコートの紳士との一行が將に「ランチ」に移らんとする、此一行は空前の大戦役の終幕として我帝國が建國以來初めて陸地を以て外國と界する、樺太境界副定事業を學術的に典範的に成功し、約により関係書類交換の爲め、浦塩港に出向する一行なので、識ると識らざるとに拘らず、黒山の如き群集は、埠頭を圍んで、此名譽ある一行の前途を祝福し、盛に萬歳を叫んで居る、此群集を分けて、一將軍が頭れた、先づ前の將軍に挨拶シ、フト一行中の一老紳士を認るやいなや、「アゝ先生！」と其前に進み叮嚀に／＼挨拶を述べられた、此瞬間、高朗眞摯なる両者人格の美にうたれて人皆嘆美措かず、中には何とはなしに泫然涙を垂れたものさへあつた、將軍はやがて再會を期して別を叙し、徐ろに前の將軍を顧み、此老紳士は予が少尉時代の恩師で其高邁なる人格と、懇切なる指導とは三十有餘年夢寐の間も諉るゝなし、縦令人に低くも天に高く凜たる清節、皎たる忠誠は、實に邦家の至寶である、どうぞ、何卒予になり代りて、彌が上にも御愛護をお頼みすると、くりかへし／＼お頼みになつた。此の初の將軍は樺太境界副定委員長大島閣下、後の將軍は在敦賀の旅團長仙波\*閣下、そして老紳士は誰ぞ陸地測量師矢島守一君其人であつた。

(三交會誌第二三號所載 古田和三郎氏寄稿)

元陸地測量師杉山正治氏の遺續

第一 前書キ

杉山正治氏ハ旧幕臣ノ出身、幼ニシテ沼津兵學校ニ入學、幕臣著名ノ先輩ト共ニ同校ニテ新式教育ヲ受ケラレタリ同氏カ英語ニ堪能ナリシハ蓋シ同校ニ於ケル研究ノ素養ニ依ル明治十一年二十才ニシテ内務省地理局雇拜命主トシテ天測ト陸測ニ従事二十一年理科大學書記ニ轉任天文台勤務ヲ命セラレタルカ間モナク同年陸地測量部ニ轉任二十四年第一期高等學生卒業陸地測量師ニ任官爾來先輩矢島守一氏ノ助手トシテ或ハ一等三角測量ニ或ハ基線測量ニ補佐ノ重任ヲ完フシ二十九年度須坂基線ヨリハ基線測量主任ノ大任ヲ矢島氏ヨリ引継キ爾後連續斯業ニ精進大正六年秋病ニ仆レル迄実ニ九ヶ所ノ基線測量ニ専任又測地學委員トシテ相模野基線檢測及三鷹天文臺内ノ基線設置及測量又各種基線尺ノ比較作業等本邦基線尺及基線測量ニ関スル業績ハ実ニ顯著ニシテ其蘊蓄ノ豊富ナル蓋シ同氏ノ右ニ出ツル者ナシ又一方第一班ニ於ケル勤務ハ或ハ檢査掛トシテ或ハ班長トシテ明治二十九年ヨリ大正六年発病ニ至ル迄実ニ二十二年ノ久シキニ及ベリ全一班ニ此ノ如ク永年勤續スルコトハ殆ント他ニ類例ナシ以テ部カ如何ニ同氏ヲ重用セラレタルカヲ窺フニ足ル其間独逸國留學ヲ命セラレ又万国測地學委員會帝國委員トシテ前ニハ丁抹國へ後ニハ独逸國へ參列仰付ケラル三十九年独逸國留學ヨリ歸朝以後大正六年秋発病迄実ニ二十二年間修技所學生ノ量地學教官トシテ育英教育ニ従事シ且ツ三角科諸般業務ヲ矢島氏ト協力シテ科長ヲ補佐スル等実ニ兩氏ハ三角科ノ功勞者且後進ノ恩師トシテ正ニ異彩ヲ發揮シタル双璧ト稱スルヲ得ベシ彼ノ三五會及三交會ノ發刊ニ係ハル月刊會誌編纂事務モ杉山氏ガ専ラ其統率ニ當リ多年故障ナク發刊スルヲ得タルハ全ク同氏ノ熱誠ト努力ニ依リタル為メナリ大正六年秋串本驗潮

場巡視出張ノ前日上司へ申告ヲ終リ昼餐後「フロツクコート」姿ノ佷突如腦溢血ニ罹リ第一班長ノ椅子ニカケ机ニ靠レツト人事不省ニ陥リ爾來療養ニ努メシモ言語意識明瞭ヲ欠キ翌七年四月退官十年秋齡六十三猶春秋ニ富ミナガラ遂ニ逝去セラレタルハ誠ニ痛惜ニ堪ヘザル所ナリ寔ニ氏ハ一生ヲ我測量界ニ捧ゲ猶餘勢ヲ抱持シ前途ノ輿望ヲ擔ヒナガラ一朝病ニ仆ルニ至リシハ技術者トシテ全ク光榮アル殉職ト云ツテ可ナラン

## 第二 官歴拔萃

・東京府士族安政六年四月二日生・明治十一年六月地理局付雇全局測量課勤務・二十一年八月理科大學書記判任七等天文臺勤務・同年九月陸軍屬判任七等陸地測量部附・二十四年七月高等科卒業八月陸地測量師(八等)・二十五年二月從七位・三十三年四月測地學委員會委員(内閣)・三十五年六月勲六等瑞寶章・三十六年四月御用有シ独逸國ニ於差遣・同年五月丁抹國「コーペンハーゲン」ニ於ケル万国測地學委員會へ參列被仰附・三十九年六月独逸國留學ヲ卒へ英米ノ測量事業ヲ視察シテ歸朝・四十四年十二月高等官四等・大正元年八月万国測地學委員會へ參列ノ爲独逸國へ出張被仰付(内閣)・同年十二月歸朝・大正四年六月勲四等瑞寶章・同七年四月二級棒依願免本官・同年五月從四位

## 第三 顯著ナル業績

・杉山氏ハ幼時沼津兵學校ニテ英語ヲ修得シ爲メニ英語ニ堪能ナル上第一班檢査掛時代多忙ノ身ヲ以テ二ヶ年間外國語學校独語專修科ニ通學次テ独逸國へ三年間留守シタルヲ以テ英獨兩語學ニ通シ其為メ我測量部技術官中外国事情ヲ通曉其智識ヲ注入シタル手腕力量ハ嶄然頭角ヲ表ハスノ觀アリテ測量作業方法ノ改正修技所教育ノ刷進等ノ

赫々タル功績ヲ上ケラレタリ

・明治三十九年ヨリ大正二年ニ亘ル三角科各作業ノ方式実行法及各種器械ノ説明書ハ素ヨリ多数ノ委員ノ手ヲ経テ完成シタルモノナレドモ其中心指導者トシテ督励シツゝ且ツ須要部分ヲ担任シテ遂ニ其完成ヲ告ケタルハ蓋シ矢島、杉山両氏ノ努力ニ負フ所多シ

・杉山氏ハ我基線尺及基線測量ノ權威者ニシテ斯業ニカケテハ蓋シ同氏ノ右ニ出ツルモノナシト云フモ過言ニアラズ同氏ハ最初矢島氏ニ就キ米國「ヒルガード」式ノ基線尺ニ依ル測量方法ヲ習得明治二十九年ノ須坂基線以後ノ基線ハ独逸留學中薰別基線丈ケ之ヲ三輪測量師ヲシテ代行セシメタル外ハ大正六年病ニ仆レル迄實ニ終始一貫斯業ニ専念勤續シ殊ニ三十五年頃ヨリ開始セル測地學委員會ノ事業タル相模野基線ノ檢測及後ニ新設シタル三鷹天文台内ノ菱形基線ノ建設兩基線場ニ於ケル各種基線尺ノ比較研究ニ専任、多年ノ努力ノ結果遂ニ基線尺ハ「ギョーム」式\*又基線実測用トシテハ「エーデリン」\*式線條尺ヲ以テ最適器ト確定シ兩器ヲ以テスル測量法ヲ創定シ以テ其後ノ斯業ノ爲メノ基礎ヲ確立シタル功績ハ實ニ我邦ノミニ止マラズ万国測地學會ニ與ヘタル裨益亦尠カラザルモノアリト思ハル

・明治三十九年独逸國ヨリ帰朝スルヤ欧米各國測量事業ノ視察ヨリ得タル資料ニ基ツキ同年八月二十日堂々十四項ニ亘ル有効適切ナル大意見書ヲ提出シタル次第ハ沿革誌上ニ記録シアル通りナリ其内三角及水準測量成果ノ公表ハ已ニ実施セラレ、写真測量ノ研究ハ今ヤ既ニ実行期ニ入りテ時局ニ即應貢獻シツゝアル所ナリ又三角測量実行法ニ就テノ意見ハ殆ンド全部実行セラレツゝアリ其内夜測用回光燈ニ「アセチリン」使用ノ件、制光板使用ノ件等ハ已ニ矢島氏ニ

関スル記事ニ見ラルゝガ如ク何レモ杉山氏ノ意見ニ基ツキ矢島氏カ其實行ヲ遂ケラレタルナリ又三角測量計算ノ各結果ノ精度ヲ算定スルコト、三等三角平均法ノ重量ノ改訂及一等補点ト二等三角平均法ニ二卓同時平均法ヲ採用スルコト等何レモ重要ナル劃期的改訂ト云フベシ

右意見ノ内未タ実施ヲ見ザルニ項目即第一各官省ニ於テ施行スル測量事業ヲ監督統一スヘキ最高機關ノ新設、第二地籍測量方法ノ制定ハ其後屢々是レカ實現ヲ主張サレタル問題ニシテ今回測量隨録編纂ニ當リテモ各委員ヨリ文ニ言ニ此ニ関スル意見ノ開陳アリタルヲ見ル世界各国ガ久シキ以前ヨリ普ク之ヲ行ヒ独リ我邦ノミ不能ノ理由ナキ筈ナリ殊ニ地籍測量ハ新領土タル沖繩、台湾、朝鮮、關東州已ニ完了滿州亦近ク完成セントスルニ拘ラス内地ノミ之ヲ等閑視スルハ誠ニ不可解ナル事實ナリ平和克復ノ曉ニハ速カニ之レカ實現ヲ見、以テ故人ノ靈ヲ慰ム可キナリ

・明治四十三年伊豆七島、小笠原諸島巡視ノ結果ニ基ツキ離島三角測量ニ関シ特種実行法ヲ案出上申シ爾來西南諸島沖繩諸島及千島列島等ハ之ニ準拠シテ実施ヲ見タリ

・台湾、朝鮮及關東州ノ各土地調査ノ基礎タル地籍測量方法ハ皆杉山氏ノ研究創案ニ基ツク方法ニシテ又日露戰役後北朝鮮ヨリ吉林長春ヲ経テ遠ク蒙古洮南府ニ及ブ簡易三角鎖ノ測量方式モ亦全氏ノ意見ニ依リタルモノニシテ其功亦尠シトセズ

・大正八年六月収蔵ノ独逸書計四十四冊ヲ測量部ニ寄贈セラレ是等ハ何レモ教育上研究上貴重ナル参考書トシテ今猶重用セラレツゝアリ

#### 第四 杉山氏に関する逸話

(1)杉山氏は技術者として珍らしき円満なる紳士にして且つ高潔なる人格者であつた、そ

れ故に奇行逸事に就ては餘り之を耳にせず是は寧ろ氏の円満篤実の人格の反影とも見らるべし而して熱心なる基督教信者なりし由我等が常に敬恭措かざりし所亦故なしとせんや

(松尾義男)

(2)同氏は酒と烟草に掛けては桁外れの嗜好者なりし烟草は「シガー」ノ強烈なる香りを愛し酒は「ウキスキー」「ブランデー」等ノ洋酒を好み之れが健康無比と称せられたる同氏が脳溢血に仆れたる發病の源因たりしとは眞先きに來診したる醫師の言なりし由酒量は斗酒猶辭せずの慨ありしも談論風發平素に比して氣焰を發揮するのみにて嘗て酒の爲めの失体を耳にせず寧ろ飲みて益々精神の明晰を加ふるの風あり塩野原基線網觀測作業に予は副手として隨行の際道中一酒店に立寄り大茶碗數個を列べて之に冷酒を満酌せしめ之を片端より立續けに飲み干し別に歩行に異状もなく其俛一測站到り着無事觀測を遂行せられたるには只々驚くの外なかつた

(梅津武雄)

(3)初代東京天文臺長寺尾博士\*より直接聽いた話であるが博士が佛國留学より歸朝直ちに天文臺長に任せられたが當時は未だ星學專攻の學士もなく適當の助手なくて困つて居る処に恰も杉山氏か地理局より轉任し來り天測の素養もあり英語も出來頭腦明敏篤學勤勉の好助手として前途を期待せしに僅か月棒五円の差の爲めに測量部に轉任を餘儀なくせられたる時には全く片腕を失ひたる思ひかしたと

(4)同氏は明治二十九年頃より第一班検査掛の職に就かれたが班長唐沢大尉の殆んど病氣引籠勝で三十二年頃退官せられたそれ故に同氏が三十九年班長に任せられ大正六年發病迄実に二十餘年の久しき殆んど

一人にて班長検査掛の両役を勤め通された自分は久年第一班員として同氏に私淑したる一人なるが其間の同氏の繁忙は全く文字通りにて當時未だ卓上電話の設備なき時代とて部科長事務官時としては他科長より引切なしに呼寄せられ樞要諮問に應じ應接者亦踵を接する有様其上修技所教官を兼任する等全く席暖まる閑なき有様斯の如き多忙なりし班長は當部に於て他に比類なしと思ふ、而も健康無比精力絶倫些の疲労の色を見せず寸暇あれば直ちに書類や書籍を繙ぐと云ふ調子だつた

(5)明治三十五年に三角科五個班より成る會と云ふ意味で三五會が組織せられ杉山氏の肝煎で三五會誌と云ふ小冊子を月刊として發行することゝなる有益なる記事豊富なりし爲め部内ハ勿論遠くは台湾朝鮮等よりも入會者續出する盛況を呈し居る内大正元年牧野部長\*閣下の命に依り各科に分散せる各種團隊を綜合統一して單一の會を創設せられ名けて三交會と稱し月刊雜誌三交會誌を發行することゝなり各科に數人宛の編纂委員を指命ありたるが事實は部長始め各科長より殆んど之に關する一切の権限を同氏に一任せられたる觀ありて爲めに其編纂事務は同氏一人の裁量によりて遂行せられたり右の如き次第なりし爲め大正六年同氏が病に仆ると共に三交會は恰も中心を喪失せる如き形勢に陥り何時とはなしに三交會は名ありて実無く又元の各科各個の團隊に分散復旧し同時に三交會誌も廢刊となりたり是を以て見るも三五會三交會に關して如何に同氏が熱意と努力を傾注せられ従つて又如何に衆望を擔ひ居られしやは之を想像して餘りあり

(6)同氏の勢力絶倫拮据勉黽なりし実例一二を上れば睡眠時間を除きては殆んど思索研

究勤務に全身を傾注没頭するの風あり即ち人と談論に時を移すか業務に孜々として尽瘁するか若しくは読書に専念する等無為の時間は寸隙も無し若し有りとするればそれは假眠時間なり同氏は実に此假眠の自由に出來る特質を有せられ此点亦側近者の一斉に羨やみたる所なり暁暗に起床黄昏に及ぶ劇務に際し昼間の寸暇を利用して休養の爲め一時の假眠を要するの時、逸早く同氏は忽ち高鼾熟睡、人々が漸く眠に就かんとする頃には最早目覚めて大聲一番作業開始の號令を掛け人々をして狼狽周章せしむ朝食を喫し終るや些の開始の餘裕を與へず直ちに率先作業部署に驀進すると云ふ早業に朝便の智癖ある人は一層の苦痛を感ずるといふ有様であつた

(7) 同氏は至つて性急の上に所謂仕事好きの人なる爲め基線測量就中基線尺の比較作業の如き殆んど一律不変の興味薄き作業なるに拘らず文字通り寢食を忘るゝといふ大量獲得の酷作業(難作業を超越したるもので敢て酷作業と云ふ)に没頭すと云ふ有様、それこそ幾ら遣つても飽きるとか疲れるなどの片鱗も見せず、日没黄昏に近づき今一作業には到底時間が不足といふ間際にも時計を見詰めつゝ今一作業開始との號令あり爲めに宵闇迫り作業を中途放棄し其上暗中摸索しつゝ器械器具の始末を爲す事等、屢々なりき外業日数を可及的短縮、以て經費の大節約を期することに念願の結果は大量獲得の酷作業を敢行する結果となりたる次第にして実に職務に忠実なること氏と矢島氏とは断然常人を超越したる双璧と称して可なり

(8) 頭腦明晰記憶力能く且つ即決即断は最も氏の長所なりし常に繁劇なるを以て座右の書類は之を整頓するの暇なくいつも乱雜

に放置しありて一見不性の觀あるも如何なる細小品なりとも其位置を確認し必要に應じ臨機即時に之を取出し得るなり餘りに乱雜なるを見兼ねて之を整理し親切が仇になつて叱責されたる側近者尠からず計算筆記共其快速と能筆なる是亦他の追隨を許さず基線測量の夜勤、計算作業中、晚酌の酒気芬々とし「シガー」の香りを喫しつゝ計算に精進中の係員の側に近寄り未だか／＼との督促を受け少しでも曖昧の返事なぞするときには「チヨイト」渡して呉れとて簿冊を引つたくる様に奪ひ取り暗算と手先の早業眞に人間離れの名技直ちに正解を得て自分の手帳に其結果を轉記し比較考案しつゝそゞろに悦に入ると云ふ具合であつた、彼の八ヶ釜し屋の而も餘り人の技能を褒むることなき矢島氏が「杉山の觀測計算技能の快速にして正確なる他に比類を見ぬ」と賞讃され屢部下への訓育の題材に引出されたるを以てしても其邊の事情を窺ふに足る

(9) 矢島、杉山両氏は三角科と云ふよりも寧ろ我測量部の生んだ偉大なる技術官にして其人格と業績とは燦として永久に後世の模範たるべき何れ劣らぬ双璧と称するを得べし但し之を率直に仔細に比較検討すれば其性質行狀に於て大に異なる所あり矢島氏の鉄石の如き俊敏辛辣所謂秋霜烈日人をして覺へず威服せしむるに對し杉山氏は落花流水温容寬度所謂春風駘蕩人をしてそゞろに敬慕の念を抱かしめ前者の一度び意を決し其意思を主張するや頑として人の説を傾聴するなく爲めに往々にして上司の意図にも屈せざるの氣骨稜々たるに對し後者は淳々として我意を説き又相手の説をも十分に傾聴するの雅量有し時としては寧ろ上司の意図を鵜呑みに盲従するの風ありたり例へば前記矢

島氏が藤井部長と二日間に亘る激論の上遂に我意を張り通したると杉山氏が折角出来上りたる満蒙三角測量員編成を新着任測図部長の意図を承けて実行不可能なる大縮小案を承認し又大正四年度より北海道三四等三角測量の配臬及精度に未曾有の大低下案に翼賛して何れも他日の批難を招くに至りたると矢島氏が一巨信任したる者は飽く迄過信重用し忌憚に觸れたる者は限りなく抑壓を加ふる等聊か部下に対する偏頗の憾みありしに対し杉山氏は誰人も深く之を愛し一視同仁的に之を教訓撫育するの風あり之れが例としてハ矢島氏が前記松本某を過信重用せし事の外に測量部著名の酒癖家として幾度か失体を重ねたる谷口某が樺太境界劃定事業の際一夜泥酔帯剣の俣矢島班長の面前に迫り二三問答の末貴官を覚醒して遣るとて忽ち右の鉄拳にて其の右顔を強打し爾来幾度か免官処置を主張したるに対し杉山氏は之を庇護訓戒しつゝ只管覚醒を期待し某が北海道一等三角副手として出張中誓約を破り又復宿癖を発動遂に免官となるや猶之を見捨てずして朝鮮土地調査局に轉任方斡旋したるが如き以て両氏性格の相異なる様相を窺ふに足る

((3)乃至(9)平木安之助)

## 用語説明

### 蕃地\* 蕃社\* 生蕃\*

台湾原住民のうち、大陸から移住してきた漢民族と同化せず、清国や台湾総督府に従わなかったものを生蕃と言った。また、彼らが住む土地、集落をそれぞれ蕃地、蕃社と言った。

### 對回 (対回) \*

「ついかい」と読む。測量機器の器械誤差を消去するために行われる観測方法で、望遠鏡の正の位置と望遠鏡を 180° 回転させた反の位置で同一

目標物を観測する。通常は目盛盤の誤差を軽減するために、目盛の位置を変えて複数対回観測を行う。

### 前方交會法\*

位置が既知の2地点より目標地点の方向角を観測し、その測線の交点する位置を求める測量方法。

### 新原点虎仔山\*

台湾南投県埔里鎮にある虎子山（虎頭山とも）  
インバアル\*

鉄とニッケルの合金。フランス系スイス人の物理学者で国際度量衡局の第5代所長であるシャルル・エドゥアール・ギヨーム（Charles Edouard Guillaume）が、鉄とニッケルの合金が常温においてニッケル36%で極めて小さい熱膨張率となるインバー効果を1897（明治30）年に発見し、1920（大正9）年にノーベル物理学賞を受賞した。温度変化による長さの変化が少ないことからインバー（インバール）合金は基線尺に用いられている。

### ヒルガード測鐸\*

ヒルガードとは、ジュリアス・ヒルガード（Julius Erasmus Hilgard；米国沿岸測地測量局（米国沿岸測量局から改称）の局長を務めた。）に由来。

ヒルガード測鐸は、1974（明治7）年に開拓使が米国から導入した長さ4メートルの棒状の鉄製基線尺。

### 隘勇\*

台湾原住民の襲撃に備えて設置された防衛組織。

### 僂僂\*

「せむし」と読む。背中が丸まる病気、または病気にかかったその人のこと。

### 長谷川鉄道部長\*

長谷川謹介（はせがわきんすけ）。台湾総督府鉄道部の部長。台湾縦貫鉄道建設に尽力し、台湾鉄道の父と呼ばれる。

### 後藤長官\*



後藤新平（ごとうしんぺい）。台湾総督府民政長官、臨時台湾土地調査局長。後に南滿州鉄道総裁、鉄道院総裁、外務大臣等を歴任。関東大震災後に内務大臣兼帝都復興院総裁。

#### 水路大技士\*

海軍の大尉クラスの士官。奏任官 4 等。

#### 水路大監\*

海軍の大佐クラスの士官。奏任官 1 等。

#### 奉公義會\*

報効義会のこと。千島列島の開発拓殖事業を目的として 1893 年に設立された。

#### 東察加「ロバトカ」\*

「ロバトカ」とあるが、正しくは「ロパトカ」。ロパトカ岬はカムチャッカ（東察加）半島南端の岬

#### 小野東風ノ蛙柳\*

小野東風（道風）は平安時代の貴族。書の名人、三蹟の一人。散歩途上で柳に向かって飛びつく蛙に遭遇するエピソードが有名。花札の絵柄の一つ。

#### 初代三角科\*

田坂は初代三角科長。「長」が脱字。

#### 須坂基線\*

長野県須坂に設置された全長 3291.9120m の基線。

#### 藤井部長\*

藤井 包總（ふじい かねすけ）第 3 代陸地測量部長。

#### 迅速二万分一畧測圖\*

迅速測図のこと。三角測量成果を利用する正式測図は費用も時間もかかるため、参謀本部は明治 13 年から 19 年にかけて三角測量を行わずに地図を応急的に整備した。

#### 松村少佐\*

松村 法吉（まつむら ほうきち）第 8 代陸地測量部長。当時は工兵少佐で陸地測量部班長。

#### 大島委員長\*

大島 健一（おおしま けんいち）樺太国境画定委員会の日本側委員長、当時陸軍砲兵大佐。後の

陸軍大臣。

#### 本所駅\*

現在の錦糸町駅。大正 4 年に改称した。

#### 次男君\*

矢島 俊吉。

#### 当時商大生\*

ここでいう商大は現在の一橋大学のこと。当時は高等商業学校（高商、予科 1 年・本科 3 年の 4 年制）で、1902（明治 35）年に東京高等商業学校、1920（大正 9）年に東京商科大学（商大）と改称し、1949（昭和 24）年に一橋大学。

矢島俊吉は明治 32 年に高等商業学校の本科 3 年生であったため<sup>2)</sup>、高商生が正しい。

#### 鳳山丸\*

大阪商船所属の貨客船。日露戦争後に開設された敦賀～ウラジオストク（浦塩）直行線で運用されていた。

#### 旅団長仙波\*

仙波 太郎（せんば たろう）歩兵第 18 旅団長、陸軍少将。当時、大島健一も陸軍少将。

#### 「ギョーム」式\*

ニッケル鋼製 5m 基線尺。万国度量衡局副長だったギョームの考案により 1902（明治 35）年にフランスで作製された。ニッケル 43、鉄 57 パーセントで膨張係数はメートル原器とほぼ同じとなっており、メートル原器と基線尺をつなぐ検定尺（標準尺）の機能を持つ。H 型の断面を持つ。

#### エーデリン\*

エドヴァルド・イエデリン（Edvard Jäderin）スウェーデンの天文学者、測地学者。「エーデリン式線條尺」はインバール合金製の 25m の線状（ワイヤー状）の基線尺。

#### 寺尾博士\*

寺尾 寿（てらお ひさし）測地学委員会の初代会長。

#### 牧野部長\*

牧野 清人（まきの きよと）第 5 代陸地測量部長。

## VII. 測量随録原稿と研究蒐録「地図」掲載稿の差異

大田(2021)で紹介したように、「測量随録原稿」の内容は「研究蒐録『地図』」に「測量随録・摘録」として一部が掲載されている。これまでに公開した7名の原稿のうち、「制光板・回光燈・回光通信信號法の利用について(平木安之助)」、「臺灣の三角測量(若林鶴三郎)」、「矢島測量師のこと」(平木安之助蒐録)の3稿である。原稿と掲載稿を比較すると、いずれも校正がおこなわれ、文語調が口語調に直されていたり、挿絵が新たに挿入されていたりと差異がある。他方で、内容については原稿も掲載稿もほとんどそのまま掲載されている。これは、今回までに掲載しなかった村山維精の原稿も同様である。ただし、割愛された内容も無いわけではなく、著者の私感や不祥事等の測量随録として後世に残すには相応しくないと判断されたと思われる内容は割愛されている場合もある(表2)。

中島可友の原稿に限っては内容に多くの差異がある。原稿は本人の手記を転記したものと思われ、戦地のさらに細かい描写が随所に見られるが、掲載稿ではその多くが削除されている。これは事実の羅列が続く読みにくい原稿を編集した結果とも、あまり公にしたいくない事実が含まれているとも考えられる。

表2 掲載稿で削除された記述(主要なものを抜粋)

制光板・回光燈・回光通信信號法の利用について(平木安之助)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・素ヨリ其頃ハ割増ヤ食費支出ノ規定ハ無キ時代ナリ</li> <li>・是全ク矢島測量師ノ熱心ナル指導ト各官ノ努力ノ然ラシムル所ニシテ誠ニ慶賀ニ堪ヘザル次第ナリ</li> </ul>
臺灣の三角測量蒐録(若林鶴三郎)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従て内地と同じ器械で同じ回数観測する点にしても之を決定</li> </ul>

	<p>する與件に相違があるので精度の低下は免れない此様な訳で内地と同様に三等三角点四等三角点と云ふ様な名稱を用ふる事は許されず</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・而して太洋中にある臺灣の位置に此程度の偏りと振れが有るとしても実際問題に影響する場合は殆ど無いと考へる。</li> </ul>
矢島測量師のこと(平木安之助蒐録)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今般不肖命ニヨリテ同氏并ヒニ杉山氏両先輩ノ遺績記録ニ當リ両氏ノ人格業績ノ餘リニモ偉大ナルニ對シ意足りテ文拙ク十分ニ此重責ヲ全ウスル能ハザルヲ遺憾トシ且ツ恐懼ニ堪ヘザル次第ナリ</li> <li>・其間器械ノ使用法規標ノ構造法等微ニ入り細ニ及ビ独特ノ研究考察ニ依リ以テ今日ニ及ブ所ノ確固不動ノ方式実行法ノ完備ヲ見ルニ至リ且回光燈制光板及回光通信々号法ノ制定モ同氏ノ考案ニ依ルモノニシテ斯業ニ對スル同氏ノ功績ハ筆紙ニ尽シ難キ感アリ</li> <li>・遂に山本米三郎の二等原簿改竄事件とい</li> </ul>

	<p>ふ矢島氏一生一度の失策事件も起きたのである（因に山本は全期生中の逸材内外業共嘗て人後に落ちたることなし二等三角測量の不正行為発覚して免官となった）</p>
--	--

は昭和2年3月7日の北丹後地震、昭和6年の伊豆は昭和5年11月26日の北伊豆地震、昭和8年は昭和8年3月3日の昭和三陸地震、昭和9年は昭和9年9月21日の室戸台風、昭和10年は昭和10年7月11日の静岡地震、昭和11年の台は昭和10年4月21日の新竹・台中地震（台湾中部地震）に対応している。なお、表中の点数は、一部に陸地測量部沿革誌終篇（陸地測量部, 1930）、陸地測量部沿革誌終末篇（高木, 1948）等の記載との齟齬がある。

- 2) 矢島俊吉が作成した文書（矢島, 1899）が一橋大学に保管されている。

### VIII. おわりに

原稿の翻刻の掲載は今回の掲載で一旦終わりとなる。今後、原稿の内容について公開や調査を続けるためにも、ひきつづき前々号（大田, 2021）表1に記載のある執筆者について情報をお持ちの方は下記メールアドレスまで情報を提供していただければ幸いである。

**筆者メールアドレス**  
ohtageo1031@gmail.com

### 付記

今回の原稿作成時には国土地理院大木章一参事官よりご助言をいただきました。記して謝意を表します。

### 参考文献

- 大田寛之 2021. 「『測量随録 原稿』とその内容について」 外邦図研究ニューズレター12, 56-70 頁.
- 大田寛之 2022. 「『測量随録 原稿』とその内容について (2)」 外邦図研究ニューズレター13, 19-42 頁.
- 高木菊三郎 1948. 「陸地測量部沿革誌 終末篇」
- 矢島俊吉 1899. 「製茶賣買慣習取調書」  
(<https://hdl.handle.net/10086/46307> 最終閲覧日 2023/1/11)
- 陸地測量部 1930. 「陸地測量部沿革誌 終篇」

### 脚注

- 1) 表の災害復旧欄について、大正 13, 14, 15 年は関東大震災、昭和 2, 3, 4 年の丹後